

JASIS

NEWS

No. 52

2013/9/23

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

「建築系学会大集合」という特集を読んで

学会長 直井英雄（東京理科大学）

ご存じの方も多いのではないかとと思われるが、日本建築学会の機関誌「建築雑誌」2013年7月号で、「建築系学会大集合」という特集をしている。特集での調査から挙がってきた学会、実に245団体。私の知っている学会で、名前の挙がっていない学会がいくつもあるので、しつこく調査をすればその数はもっと増えるだろう。ずいぶんあるものだと思うし、そんなものだろうとも思う。

日本インテリア学会も、むしろそのひとつとして、「建築系学会総覧」のページで紹介されている。しかし、そんなことはどうでもよい。それより、この特集、「学会というもの」を改めて考えてみるきっかけとなりそうな指摘や論点がいろいろと提起されていて、なかなか刺激的なのである。

そのひとつの興味深い指摘は、建築系学会の全体像はひとつの生態系をなしていると見られる、という指摘である。すなわち、それぞれの学会は、既存学会群のなかで何らかの存在の必要性からつくられ、その世界の中で適応できたものが存在し続けていて、全体として緩い「生態学の世界」をつくっているという見方である。なるほど、そう見ることもできるのかと思う。

もうひとつのさらに興味深い指摘は、「小さい学会と大きい学会」とでは、果たす機能の重点が自ずと異なってくるのではないかと指摘である。小さい学会は、どちらかというと、学会の存在の必要性を色濃く残しているから、知的活動が「とんがって」いて、刺激的、ラディカル、これに対して、大きい学会は、いい意味では

公平だが、ややもすれば退屈、官僚的になりがちのこと。知的生産性の活発さでいえば小さい学会、業績の社会的認証機能の格でいえば大きい学会、ということになるのか。

その他、「学会のライフサイクル」という切り口や、「学会の国際化」という論点、あるいは「学会活動のあとの酒の席」という話題なども、議論のネタとしてなかなかのものと評価できる。会員諸兄のなかで、「建築雑誌」を手にする機会のある方には、ぜひ一読をお勧めしたい。

しかし、それはともかくとして、読んだ方も読まなかった方も一堂に会し、われらが日本インテリア学会の将来をどう構想するか、それこそ「学会活動のあとの酒の席」ででも、じっくりと議論したいものである。

■2013年度総会

総務委員長 上野義雪（千葉工業大学）

記録 平田圭子（広島工業大学）

日時：平成25年6月22日（土）13：00～13：30

会場：千葉工業大学

配布資料：

- ①平成25年度日本インテリア学会総会資料
- ②支部報告・部会報告・委員会報告（参考資料）
- ③名誉会員の推挙
- ④論文報告集募集規定・論文報告集執筆要領
- ⑤第25回大会（京都）のご案内
- ⑥シンポジウム「いすとインテリア」資料

■議 事

1. 開会宣言（白石）
2. 会長挨拶（直井会長）
3. 定足数の確認（白石）

正会員数386名のうち、委任状92名、出席者数29名、合計121名で、総会成立に必要な定足数（正会員386名の1/4以上97名）を満たしていることが確認された（会則15条）。

4. 議長団の選出（白石）

- ・議長：直井会長、書記：平田、議事録署名人：渡邊、松本（直）が選出された。

＜審議＞

5. 第1号議案：平成24年度事業報告および収支決算報告（案）の件

- ・上野総務委員長より、平成24年度の事業報告および決算報告（案）の説明があり、佐藤・上野（弘）両監事による監査報告（白石代読）を受け、資料①（P.1）の通り賛成多数で承認した。

6. 第2号議案：平成25年度事業計画（案）および収支予算（案）の件

- ・上野総務委員長より、平成25年度の事業計画（案）および収支予算（案）の説明があった。
- ・会員減少による会費収入の減少が予想されることから、事務局経費を5%、その他の予算は8%を基本とし、昨年度より減額しているとの説明があった。
- ・平成25年度の事業計画（案）および収支予算（案）について、資料①（P.2）の通り賛成多数で承認した。

＜報告＞

7. 平成25年度役員（案）および組織（案）

- ・上野総務委員長より、資料①（P.3）に基づいて、平成25年度役員および組織の報告があった。
- ・昨年顧問に就任した島崎信氏より挨拶があった。
- ・湯本理事の勤務先変更により、九州支部長が空席となっているため、後任を検討する旨、報告があった。
- ・組織表内で、時限付きの特別部会として3部会（東日本大震災課題検討部会、現代インテリア部会、インテリア環境評価部会）が記載された旨、報告があった。

8. その他

- ・名誉会員の推挙について（上野）

資料③の通り、島崎、小松、岡島、小原（誠）、木村（敬称略）、以上5名について、名誉会員として今年度大会にて表彰することが報告された。

- ・論文報告集の規定について（松本）

松本（直）論文審査委員長から資料④の通り、募集規定および執筆要領の改正について報告があった。

- 1) 電子化（PDFにて投稿）による作業の効率化
- 2) 合わせて第1著者での投稿は2編まで
- 3) カラーページ費用の別途徴収など
- 4) 応募期限：10月31日まで（大学院での論文審査時期を考慮）

また、AIDIA（アジアインテリアデザイン学会）への投稿依頼があった（今年度は韓国）。

- ・日本インテリア学会第25回大会（京都）について（片山）

資料⑤に基づいて、日本インテリア学会第25回大会（京都）の説明があった。また、会場となる京都市女子大学に工事が入るため、申込期限の厳守の依頼、および当日会場の変更の可能性があることなどの説明があった（発表申込の期限は8月1日）。

■総会シンポジウム

椅子とインテリア

織田憲嗣（東海大学）

椅子には人体各部と同じ名称があるように、人間に最も近い道具と言えよう。そんな身近な道具の椅子であるが、椅子の意味を定義づけてみたい。

1. 物理的な意味として“体を受け止め支える支持具としての道具”である。ステッキや吊革、ベッド、脇息なども椅子の仲間であると言えよう。具体例として、シートステッキ（ステッキの先端を地面に付き差し、持ち手の部分を捻げてそこに腰を掛けるもの）や、天井から吊り下げられた支持具に腰を掛ける椅子、そして脇息のようなパーツを壁に取り付け、そこにもたれて休息するスタンディングチェアなどその種類は多い。
2. 精神的な意味としては“地位を表す”ものだ。組織の長のことをchairmanと呼んだり、組織内で地位が上がると椅子も立派なものとなるのは現実の社会においてよく見られる光景であろう。この地位により椅子のデザインを変えた好例として、1904年オーストリアのオット・ヴァーグナーによって設計されたウィーン郵便貯金局内の一連の椅子デザインがある。ここでは椅子を見ればそこに掛ける人物の地位が一目で理解できるものとなっている。
3. 物理的かつ精神的な意味として“居場所を表す”という概念が最近生まれた。これは2006年、北海道上川郡の東川町で始まったプロジェクトから生まれた概念

だ。その町に生まれた子供に、その氏名と生年月日を刻み込んだ子供用の椅子を贈るもので、毎年デザイナーと製作する工房・メーカーを変え、小さな椅子をプレゼントをする「君の椅子」プロジェクトだ。東川町から始まったこの運動は、やがて3町を加え、さらに東日本大震災では、あの震災の日、岩手・宮城・福島3県に生まれた赤ちゃん達に“希望の「君の椅子」”として、新たにデザインされた小さな椅子98脚がその両親達に手渡された。これらのプロジェクトに共通するのは、“生まれてくれてありがとう。君の居場所はどこにあるからね。”というメッセージが込められている。1. 2. とは、違った新しい意味をもつものと言えるのではないだろうか。

1、2で紹介した2つの意味は、人類の祖先が4本足歩行から2本足、つまり直立歩行に移行した時点で発生したと考えられる。それまでの体重を4本足で分散して支えていた姿勢から、後足2本で全体重を支えることの負担を軽減させるために、石や倒木に腰掛けたことに始まる。そして、もっとも掛け心地の良い場所には誰でも掛けられたわけではなく、それぞれのグループの最も力をもった者だけがそこに掛け、グループの者達を少し高い地位から睥睨したのである。以後、人類の進化はあったが、この椅子のもつ2つの意味は不変で今日もなお変わることなく見られるものだ。

次に椅子のもつ魅力について述べてみたい。

私達日本人は永く、床座の暮らしを続けてきた民族である。日本の一般家庭に椅子座の暮らしが導入されたのは、昭和31年、日本住宅公団により千葉県稲毛団地と大阪府堺の金岡団地が建てられ、そこにダイニングキッチンというライフスタイルが生まれたのである。今日では一般の雑誌でも椅子に関する特集記事は多く、また椅子に関する専門書も数多く出版されている。様々な家具の中でも最も身近な存在の椅子が何故人を惹きつけるのか考えてみたい。

その理由として、

1. 椅子には自己完結した美しさがある。美しい椅子は彫刻作品に勝るとも劣らない造形美があり、空間を支配する力を有している。名作と呼ばれる椅子が置かれた空間はそうしたことを証明している。
2. 椅子は他の家具と比べ、作家の個性が最もよく反映されるものである。著名な建築家、家具デザイナーのデザインした椅子を観察すると、椅子ほど作家性が現れるアイテムは他にないようだ。
3. 先にも述べたが、椅子は人間に最も近い道具であること、肘や背・脚など、人体と同じ部位の名称がある

ように、人間的な道具としての魅力もあるようだ。そして、人間は人生のかなりの時間を椅子とともに過ごしている。

4. 椅子はあらゆる家具の中で、デザイン・製作、共に最も難易度の高いものである。そのため、デザイナーは誰もが椅子のデザインを試みる。しかし、椅子には機能性をはじめ、強度、審美性、商品としての経済性など、様々なハードルがある。こうした難易度の高さ故の魅力もあるだろう。
5. 椅子には、“地位を表す”という精神的な意味があるように、人間の地位や権力に対する深層心理の「欲」がより良い椅子を生み出し、それらを所有したいと考えるのではないだろうか。

次に、名作椅子の条件について述べてみたい。

世の中には名作椅子と呼ばれる椅子は数多い。そうした椅子は20世紀に生まれたものがほとんどであるが、中でも1945年～1970年代のミッドセンチュリーの時代に名作と呼ばれる椅子の大半が生まれている。20世紀には幾つかの芸術運動が世界各地で生まれた。また、20世紀には様々な科学技術の開発や、それに伴い新素材も生まれた。こうした時代背景を抜きにモダンデザインは語れない。それぞれの時代に運よく巡り逢えた優秀な建築家やデザイナーだけが名作を生み出すことができたのであろう。名作椅子の条件は幾つか考えられるが、それらの条件を総て備えたものはあまりなく、より多くの条件を備えていることが望ましい。その条件とは、

1. 機能的であること。椅子には様々な種類があり、目的に応じた機能性を備えていなければならない。
2. 丈夫であること。椅子に対する掛け方、座り方は千差万別であり、想定外の使い方もされる。また、人体も体格や体重など千差万別である。こうした“千差万別”にも耐えられる強度と安全性が担保されていなければならない。
3. 審美的に美しいプロポーションであること。強度や機能性を備えたうえでなおかつ、全体的なバランスのとれた美しいプロポーションが要求される。各パーツとの相互関係で成立するものであり、名作椅子から各部の寸法を学び取るべきである。
4. ロングセラー、ロングライフなものであること。私はひとつの目安として、25年間以上、商品化されていることを掲げたい。単にメーカーが生産を続けるだけでは成立せず、販売店、そしてエンドユーザーが支持をしてこそ成り立つものである。
5. エポックメイキングな作品であること。20世紀に興った様々な芸術運動を象徴するような作品。必ずしも機能性や経済性などの条件を伴うものではない。

6. 物と価格のバランスがとれていること。椅子は道具であり、日用品でもある以上、常識を超えた高額なものには問題がある。しかし、価格訴求のために生まれた低価格のものは、より問題である。
7. あまり重過ぎないこと。家具の語源となったラテン語のMobilisには“動く”という意味も含まれており、ドイツ語やデンマーク語、フランス語、スウェーデン語、イタリア語の家具を表す言葉はこのMobilisから生まれている。家具は動かすことが前提であり、椅子も動かすことを考えればあまり重いものは問題であろう。
8. 修理が可能なこと。資源や環境のことを考えれば良いものを長く修理をしながら使い続けることが望まれる。
9. 環境に配慮された素材が使われていること。これは強度とはまた別の意味での安全性につながる点でもある。リサイクル可能なもの、環境に付加を与えない素材が望まれる。

以上のような椅子についての知識に基づいた、椅子を中心としたコージーコーナーの提案。

日本では、戦後の復興期に行った住宅政策が、その床面積に動きを置いたものではなく、戸数を増やすことを中心とした。しかも、それらの住宅の構造物としての寿命は極めて短いものであった。この住宅政策は、その後の日本の暮らしにも大きく影響を与えた。かつて、“この家はお父さんが建てたものだ”と言わしめた住宅は、いつの間にか“この家はお父さんがローンを組んで買ったもの”に変化した。かつては父親が大工の棟梁と打ち合わせ、深く住宅に関わってきた。しかし、経済成長期になると、父親は仕事中心の生活となり、家は寝るための場所であり、家との関わりが希薄になると同時に、父権も弱くなり父親の居場所も無くなっていった。そして、この経済成長期は都市部への人口の集中化をも招き、それまでの大家族から核家族化を促した。核家族化は高齢者から若い世代への生活文化の継承をも分担することになったのである。そうしたことを踏まえて提案したいのが限られた居住スペースの中であって、父親の居場所を創り出し、父親が家や暮らし方にもっと関心を持ち、ひいては生活文化の向上の一助にもなるのではないかということである。

コージーコーナーは畳1枚分のスペースがあれば実現できる。リビングルームの片隅や、階段室、ホールなど、住宅の中には畳1枚分のスペースならば確保できるだろう。その構成要素として、考えられるものを列記すると、

1. 畳1枚分くらいのカーペット。これは自分の領域を示すものであり、このスペースの確保は重要である。

2. イージーチェア。居心地の良い場所を作る訳であるから安楽性の高いハイバックチェアとオットマンまたは、スツールのセットが理想的である。
3. サイドテーブル。60cm角くらいの天板の小さなテーブルが望ましい。丸型でも角型でも問わず。高さは50cmくらい。
4. テーブルランプまたは、フロアランプ。テーブルランプはサイドテーブルに載せるものであり、あまり大きくないものを。フロアランプはイージーチェアとの組み合わせで読書用に適した光源の位置を確保すること。また、ペンダントを引き、サイドテーブルの上に設定する場合、その光源が高くないように注意。光源は低ければ低いほど、アットホームな雰囲気を生み出すもの。高く設定すると、オフィシャルな空間になってしまう。
5. 膝掛。コージーコーナーで転寝をすることは最高のひと時。風邪をひかないためにもぜひ欲しいもの。ただし、使い終わったらきちんと畳んで置くこと。使えばなしの膝掛はだらしなく、そのコーナーを台無しにするものだ。
6. クッション。イージーチェアに長時間掛けていると身体のどこかに不具合を生じるもの。そんなときに役立つのがクッションだ。
7. 上記のほかに、テーブルの上に置けるサイズのミニオーディオや、壁に接したコーナーであれば、絵画や写真を飾るものもよい。また、観葉植物や写真集などもコーナーには欠かせないアイテムだ。

コージーコーナーを構成する上で重要なことは、全体としてのコーディネート、ハーモニー、そして各要素のテイストを揃えることである。このコーナーはあくまでも寛ぎのスペースであるため、パソコンなど仕事に関わるものは置かないこと。

まとめ

最近の日本では、衣食住の総てにおいて、ファスト化現象が見られます。それらは、いとも簡単に家庭に持ち込まれてゆきます。その結果、産業の空洞化と、著しい生活文化の低下がみられます。それらファスト商品に共通しているのは異常な価格の安さによってもたらされる“ヒトとモノの接点の希薄さ”であり、それらは間に合わせ的な使われ方により、やがて飽きて捨てられるものでしょう。中でもファストファニチャーは、機能的や安全性、品質などに様々な問題を内包しています。価格の裏側にある問題点に思いをはせることなく、安易に購入し、間に合わせの期間が過ぎるとやがて捨てられます。最近、よく耳にする“断捨離”の考え方の背景には、こうしたファスト文化があるように思えてなりません。要

は粗悪な低価格商品を家に持ち込まないことでしょう。かつて、あるヨーロッパの財務大臣が口にした“我が国には粗悪な低価格商品を購入するほどの余分なお金はありません”という言葉を重ねて受け止めたものです。

私は常々、室内空間の質は、そこに置かれる家具やインテリア・アクセサリーの質に比例すると考えています。ここでいう質とは、必ずしも高額なものではなく、愛着をもって長く使い続けられるものとして解釈してもいいでしょう。一流の建築家が設計しても、数億円もする住宅であっても、そこに置かれるものがチープで没デザインなもの、品格を欠くものではその空間は台無しでしょう。そこで提案したいのが、住宅建設に関わる総額の10%を残し、その予算で良質な、親から子へと受け継がれるような家具を購入してほしいと考えます。そうすることで、そこに暮らす人の意識も高まり、豊で文化度の高い生活を営み、その結果、不況に苦しむ家具やインテリア業界にも活気が生まれてくるのではないのでしょうか。本当に良いものを長く使い続ける、使いきるという価値観を持ちたいものです。消費者ではなく、使用者であり、愛用者になりたいと思います。

私はグラフィックデザインを専攻し、イラストレーターを生業としてきました。そのため、椅子やインテリアデザインに関することは総て独学であり、今回、インテリア学会総会の場に於いて講演の機会を与えてくださったことに驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。さらに学会誌に拙文を掲載していただくことに深く御礼申し上げます。また、千葉工業大学の上野義雪先生、そして広島工業大学の平田圭子先生には大変お世話になりました。

本当にありがとうございました。

■第25回インテリア学会大会へのお誘い (京都)

大会長 小宮容一（芦屋大学）

8月1日に論文発表も大会参加も締切りました。論文発表は追加は出来ません。締切り後の集計で、発表台数は51題でした。見学会と懇親会は定員に満たず、少し余裕があります。追加して受付たいと思います。ただし、申込み順で定員に成り次第締切らせてもらいます。

見学会は、まず、京都の花街島原の揚屋で、新撰組も出入りした事でも有名な角屋です。1階の台所、網代の間、庭の臥竜の松、2階の御簾の間、青貝の間など揚屋の室礼は必見です。次にバス移動して、親鸞由来の浄土真宗本願寺派の西本願寺では、国宝の書院、対面所の障

壁画は渡辺了慶作です。書院。原則非公開の飛雲閣（外観）。伊東忠太設計の伝導院など見学します。その後バスで懇親会場のリーガロイヤルホテル京都へ移動します。

懇親会では、舞妓2名、三味線1名による舞曲をセットしました。舞いの後会場を廻って接客していただけるとのことで、京言葉を楽しんでいただけます。日本酒は、京都伏見の名酒を揃えますのでこれもお楽しみ下さい。追加申込みお待ちしております。

— 次 第 —

見学会

「島原の角屋」「西本願寺書院」「飛雲閣（外観）」「伝導院」

日時：10月26日（土）13：00-17：00（受付12：30-）

集合：角屋もてなしの文化美術館（JR嵯峨野線 丹波口駅から南東へ徒歩7分）

<http://www16.ocn.ne.jp/~sumiyaho/>

概要：角屋では、江戸時代の花街揚屋建築の遺構を見学します。西本願寺では国宝の書院造のインテリアのほか、能舞台、唐門、飛雲閣（外観）、さらに明治時代に建てられた伊東忠太設計の伝導院（1912）を見学予定です。

会費：3,000円

定員：50名（申込み順、定員になり次第締切ります）

共催：日本インテリア学会歴史部会

懇親会

日時：10月26日（土）18：00～20：00（受付17：30-）

開場：リーガロイヤルホテル京都

（<http://www.rihga.co.jp/kyoto/> JR京都駅から西へ徒歩7分。見学会参加者はバス移動。京都駅からシャトルバスあり。）

会費：8,000円

■平成25年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 上野義雪（千葉工業大学）

幹事 白石光昭（千葉工業大学）

6月22日の総会にて今期の予算が承認されましたので、今年度の学会の業務が本格的に始まりました。総会に向けては、各支部、各部会、各委員会からの活動報告および決算報告を提出いただき、ありがとうございました。

総会シンポジウムでは島崎信先生と織田憲嗣先生の講演を企画・実施し、大変貴重なお話をお聞きすることができ、盛会のうちに終了することができました。また、

島崎先生には学会活性化にむけて顧問としてのご挨拶をしていただき、その活動も始まっているとのこと。学会活性化にむけての方向性がまとも次第、ご報告いたしますが、会員の皆様にもぜひご協力いただき、次の四半世紀を活発な活動ができる学会になるよう再構築をしていければと考えております。

最後に、今年度は評議員・理事選挙の年度でもあります。年末までには選挙実行委員会を立ち上げ、各支部に選挙の依頼をいたします。お忙しいとは思いますが、ご協力よろしく願いいたします。

□広報委員会

委員長 湯本長伯（日本大学）

- 1) 事務ホームページのサーバーを日本大学に移すと共に、内容更新を行った。最近少しずつ、支部・部会・研究会等についても掲載情報を戴き、アップデートの循環が出来かけていると思われます。皆様の情報提供を引き続きお願いします。6月以降のURLは、以下のようです。宜しくお願いします。

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/>

- 2) 広報委員会では、学会メールニュースの発行を続けています（現在54号）。アドレス登録者は192名で余り増えませんが、過去のニュースはホームページからすべて見ることができます。皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/mailnews.html>

- 3) 会報は委員会内での連絡も悪く発行回数が減っていますが、年間3回の発行を目指して頑張っていきたいと思えます。その際に会員の意見を代表して戴く編集委員ですが、北海道のメンバーが居られません。前号でも広報委員会への参加をお願いしましたが、北海道・四国そして九州等のメンバーを改めて募集致します。現状は、実質4名で頑張っているところです。

なお過去の会報も、ホームページから見ることができます。ご活用下さい。

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/51.pdf>

- 4) 今号の編集委員長は平田委員（中国・四国支部）です。実際のレイアウト等は、九州大学スタッフにお願いしており、会報の企画と原稿依頼が中心の仕事ですので、意見や企画をお持ちの会員各位の参加をお願い致します。またHP・メールニュースの編集も行っております。広報委員会へのご連絡は、下記までお送り下さい。

JASISeditor@yahooogroups.jp

□国際委員会

委員長 加藤 力（宝塚大学大学院）

今回はありません

□論文審査委員会

委員長 松本直司（名古屋工業大学）

昨年度は、東アジア地区のインテリア学会関係論文集であるAIDIAに、本学会より4編の掲載となりました。本年度は7月10日の応募〆切までに2編の応募があり現在審査中です。少なめですので次年度はふるって応募頂きたいと思っております。

一方、昨年度の学会論文報告集23号は21編に及ぶ多数の応募があり、18編の掲載となりました。おかげで過去最多のページ数となり、背表紙をつけさせて頂きました。これも学会員の皆さんの、論文への熱意のあらわれと感謝するところであります。

昨年度は論文報告集の実質発行を年度内にしたいと、査読員の先生方にたいへんご無理をお願いして3月中旬には審査を終了しました。しかし、編数が大幅に増加したため編集作業に手間取り、結局出版は年度があけてとなりました。深く反省するところです。

そこで、本年度はこれまでの問題点を解消すべく、論文報告集募集規定と原稿執筆要領を、6月22日開催の理事会の承認のもとに、以下の点の変更を行いました。

- (1) 応募期限を、これまでの11月30日から10月31日と1ヶ月はやめた。
- (2) 審査と事務処理過程の効率化を目的に、論文審査委員会のメールアドレス(jasispaper@gmail.com)を開設計し、通信作業をネット処理に移行した。
- (3) 今後の応募数の増加を期待し、執筆者の顔ぶれや応募のテーマが多彩になるように、第1著者としての応募は2編までとした。

以上の変更は、現在学会ホームページに新たな募集規定と執筆要領として、原稿書式のテンプレートとともに掲載しました。ご利用下さい。

今後も、会員サービスを向上するために論文報告の審査と発行の効率化に努力していく所存です。会員の皆様には、ご協力いただくとともに積極的に応募いただきましようお願い申し上げます。

■平成25年度支部だより

□北海道支部

支部長 小林 謙（東海大学）

今回はありません

□東北支部

支部長 若井正一（日本大学）

今回はありません

□北陸支部

支部長 棒田邦夫（金沢学院大学）

今回はありません

□関東支部

支部長 山田智稔（前相模女子大学）

今回はありません

□東海支部

支部長 建部謙治（愛知工業大学）

7月6日（土）名古屋市守山区の大森会館にて役員会を開催、その後支部総会、見学会、講演会、懇親会を開催した。支部総会については、平成24年度事業報告・収支決算報告、平成25年度事業計画・収支予算案を審議し、原案通り了承された。

引き続き、尾張徳川家二代藩主、徳川光友公の生母である乾の方の菩提寺で、建設中の興舊山歓喜院大森寺の見学会を行った。大森寺は、1875年の火災によって本尊を除いて焼失しているが、百数十年ぶりに本堂が再建されることになった。設計は京都迎賓館の設計者であるKUU・KAN設計室（元日建設計）の佐藤義信氏によるもので、本堂は鎌倉時代に重源が確立した天竺様の合理的な精神を継承し、現代のコンピューターによる高度な構造解析技術と伝統的な大工の技を最大限活用した、純粋な「木の架構」である。案内は設計・監理を担当された原眞佐実氏で、参加者が28名であった。

講演会は、再び場所を大森会館に移し、佐藤氏による『日本の文化・和』と題したものであった。佐藤氏は自身の作品の紹介に絡めて日本文化・住宅の特長について持論を展開され、聴講者は改めて日本建築を再考することになった。その後場所を大曽根に移動して懇親会を

開催したがここでも日本の建築文化の話題で大いに盛り上がった。

なお、今年4月に実施したインテリア7団体で構成する連絡会による第12回リレーセミナーは、本会会員の高橋敏郎氏による「マッキントッシュの椅子とインテリア」の講演であったが、これも参加者が約100名で盛況であった。



見学会の様子



大森寺本堂内観CG

□関西支部

支部長 小宮容一（芦屋大学）

平成25年度に入り、4月27日に第1回の見学会を開催しました。参加者15名。神戸市のポートアイランドにある、手塚建築研究所設計、積水ハウス施工の「チャイルド・ケモ・ハウス」です。日本初の住宅型小児がん療養施設です。見学に先立って、建築家手塚貴晴氏とチャイルド・ケモ・クリニックの院長楠木重範医師のレクチャーがあり、ハウスの企画・施設建設までの経緯をお聞きすることができました。現在の病院のシステムでは小児がんの子供に付き添う母親は、子供のベッドの脇の床で寝るなどしかなく、着替えもまま成らない……等々、付き添うことの大変さを改善する為に、親子と一緒に住め、治療に専念できる住宅型の施設が必要であるとされました。設計では19戸の住戸全てのベッドルームからブ

ライベートを守りながら庭が見える、天窓が有り空が見え、星が見える配慮は手塚氏の手腕でした。見学会の報告は関西支部のHPに掲載していますのでご覧下さい。(jasis-kansai 検索)。

さて、10月26日27日開催予定のインテリア学会第25回大会（京都）の準備ですが、参加申込み等の8月1日締切りを受けて、8月9日（金曜）夕刻から芦屋大学大阪キャンパスで、第3回実行委員会を行いました。発表台数は51台です。仙台大会の45%アップですが、私としては60台は欲しかったです。次回以降若手の研究者の発表を期待します。見学会・懇親会ともまだ人数の余裕があります。懇親会では舞妓2名の舞曲を用意しました。京都らしい一時を楽しんでいただけたと思いますので、追加して参加をお申し出下さい。その他準備は順調に進んでいます。ご安心下さい。

□中国・四国支部

支部長 平田圭子（広島工業大学）

1. 支部総会

平成25年6月29日（土）に支部総会を開催いたしました。新たに、女学院大学の細田みぎわ先生、福山大学の藤原美樹先生をお迎えし、新たな支部活動について活発な意見が交換されました。今年度から、優秀卒業設計表彰に追加して、優秀卒業論文表彰も実施することになりました。

2. 平成25年度活動方針

平成25年度活動方針は、下記のように予定しています。

- ・総会時講演会「火災時の老人ホームの安全」

講師：村井裕樹 氏

（広島工業大学 支部会員）

- ・ミニレクチャー（学生向け）*

①講演会：未定

②模型製作：西村正弘 氏（N Design）

- ・見学会*

フィン・ユール アート・ミュージアムクラブ

- ・冊子作成計画「都市のインテリア」

- ・優秀卒業設計及び論文の表彰

*印は、中国インテリアプランナー協会との共催です。



支部総会時講演会の様子

□九州支部

支部長 湯本長泊（日本大学）

2013年度も引き続き、湯本が会長をしている福岡インテリアコーディネーター協会および九州地域協会と連携して、インテリア・建築・都市の文化的側面について、一般市民向けも含む出前講演・見学会・ワークショップ等を計画している。6月には九州国立博物館（三輪嘉六館長）と協力して、地域における市民目線のミュージアム運営についての館長講演と、見学会を開催した。また今後は、昨年度に大変喜ばれた、親子で紙管イスを造りインテリアについて考えて戴くワークショップを、今年は福岡の教会の地域活動として実施戴くよう準備している。こうした活動は、小学校や小中高一貫校などにも協力戴いているが、現状を考えると、インテリア文化の幅広いエンドユーザー教育には、力を入れない訳には行かないのである。

なかなか単独の活動を展開できないが、多方面での連携を活かして活動したい。



国宝3Dレプリカにつき説明する三輪館長

■研究部会だより

□研究協議会

議長 栗山正也（KDアトリエ）

〔25年度研究部会・活動計画〕報告

1. 「特別テーマ研究」25年度助成について

本年度、第一回としてスタートし、5月に公募を行った結果、以下の応募申請があり協議会幹事による検討審査（別添資料）を行い、本年は新設部会からの申請①及び②を優先した。新たな研究テーマの評価軸としては、一般的には新規性・独創性・発展性・成功可能性・学会員への還元可能性・予算の適切性等であろうが、今回は研究予算が緊縮方向にあり、限定的に審議せざるを得ない状態であった。審議の結果、⑤のテーマ「日本近代インテリア史の調査研究」は当学会に最も必要な研究と判断し、本年度はこの1件に申請研究費の一部を助成することとした。

■研究助成事業 応募・申請数6件の概要

総額 95.2万円

- ①「現代インテリアに関する基礎研究」 9.2万円
・現代インテリア研究会（長山洋子）
- ②「インテリア環境評価に対する専門家の意識調査・研究」 15.0万円
・インテリア環境評価研究部会（仲谷剛史）
- ③「ダンボールシェルターによる一次避難環境の改善」 20.0万円
・工学院大学建築学部 鈴木研究室（鈴木敏彦）
- ④「住まいの絵本にみるインテリアと住文化に関する研究」 21.0万円
・子どもと住文化研究会（北浦かほる）
- ⑤「日本近代インテリア史の記録資料作成に関する研究」 15.0万円 インテリア史研究G
・明星大学理工学部（村上晶子）
- ⑥「椅子座面の面積と高さの着座可能時間との関係」 15.0万円
・芝浦工業大学 橋田研究室（橋田規子）

2. 平成25年度研究活動費の配分

本年度総会により確定した「調査研究予算」を研究協議会を構成する既設部会の活動と予算申請及び前記助成事業費等を勘案し、本年度予算配分を行った。その調査研究活動の内容及び、活動予算は以下の通りである。

- 1) 常設部会については、各部会の繰越金等を配慮した申請額を尊重し、若干調整し配分を行った。

- 2) 設置が承認されている特別部会から具体的な本年度の活動について、研究助成事業に応募・申請があり、その内容を検討し優先的に予算を配分することとした。
- 3) 「特別研究テーマ」については⑤「日本近代インテリア史研究」を今後の発展を期待し選出した。但し、本年度はその内容を具体化する準備費として申請額の一部を配分することとした。

以上の結果、平成25年度・研究部会の活動内容とその予算は次の通りとなった。

〔平成25年度研究部会・活動内容と予算〕

■既設部会

歴史部会：大会時見学会、他講演会開催等
・活動費〔繰越金＋1万円（本年度分）〕

人間工学部会：見学会等開催

・活動費〔繰越金（本年度申請なし）〕

計画・デザイン部会：インテリア環境評価部会支援等

・活動費〔繰越金（本年度申請なし）〕

教育部会：大会時作品展示及び巡回展1件予定

・活動費〔10万円（本年度分）〕

■特別部会

東日本大震災課題対策部会：現地調査、課題検討会等
・活動費〔繰越金（本年度申請なし）〕

現代インテリア研究部会：見学会、検討会等

・活動費〔9万円（研究助成事業分）〕

インテリア環境研究部会：アンケート調査他

・活動費〔10万円（研究助成事業分）〕

■特別テーマ研究

近代日本のインテリア史研究：資料収集他予備調査等
・活動費〔5万円（研究助成事業分）〕

■会議ほか予備費

・幹事会活動費など〔5万円〕

3. 研究協議会・幹事会の今後について

今回は、新たな助成事業「テーマ研究G」への研究費配分を考慮し、既設部会の活動費と併せて、適正な予算の活用を図るという新しい試みを行った。その結果、助成事業では新たな4つの研究グループから貴重な研究テーマを提示していただいたことは最大の収穫であり、今後この方式の成果が十分に期待できるものと考えられる。

研究協議会は、いかなる立場で予算審議を行うのか、この議論から出発した。この過程で重視したのは、以下の諸点である。

第1に、テーマ研究G助成制度において「研究テーマは、本学会において発表されたものの発展、その他、特に社会に広くその成果が期待されるもの等」とした点である。そして、研究協議会の議論をオープンにすることが必要との観点から、できれば総会時等において、シンポジウム等の公開の議論の場を設定する可能性等も検討した。今回は、審議の過程は理事会・総会において中間報告を行い、概要を学会会報において公表することとした。

第2に、研究協議会は、昨年度に全研究部会長の総意によって活動統合への合意が得られてはいるが、これまで明確な規定がなかったので、研究協議会の立場の明確化、審議の公平性・一貫性等のために、「研究協議会・幹事会覚書」（平成24年度5月・理事会において承認）にその組織、役割、運営方法等についてについて、新たな規定を定めることも検討した。また、現況の緊縮予算のもとで、研究活動費の適正額の確保についても重要課題であり、部会の活動内容の検討を含めて、25年度の理事会等において提案したいと考えている。

以上のように、今年度、幹事会は試行過程の運営であり、大きな成果は挙げられなかったが、本学会の活性化を目指す新しい展望は見出せたのではないかと判断している。

※助成事業審議経過についての確認はoikos-kd@kje.biglobe.ne.jpにメールにてお願いします。

□歴史部会

幹事 河田克博（名古屋工大）

今回はありません

□計画・構法・デザイン部会

部会長 栗山正也（KDアトリエ）

今回はありません

□人間工学部会

部会長 白石光昭（千葉工業大学）

人間工学部会では、12月の上旬に見学会を中心とした研究会を企画しております。今年度は株式会社トップン・コスモ様のショールーム見学を予定しております。具体的な内容ですが、現在のところ、見学に加えて次のような内容を検討中です。

- 1) トренд発信機能の紹介
- 2) ユニバーサルデザインへの取り組み
- 3) 印刷テクノロジーによるサーフェイスデザインの可能性

日時を確定でき次第、皆様にご連絡をいたします。年末のご多忙な時期とは思いますが、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

□教育部会

部会長 河村容治（東京都市大学）

第20回卒業作品展とその巡回展を以下の日程で開催いたします。

【大会展】

期間／平成25年10月27日（日）

会場／京都女子大学 J校舎（通称：馬町校舎） 5階会議室

主催／日本インテリア学会（担当：教育部会・関西支部）

【巡回展】

期間／平成25年12月4日（水）～12月8日（日）

会場／タチカワブラインド 銀座ショールーム

参加予定校は、以下の33校です。

大 学：千葉工業大学・昭和女子大学・拓殖大学・多摩美術大学・武蔵野美術大学・東京造形大学・東京電機大学・東京理科大学・文化学園大学・日本大学・女子美術大学・名古屋工業大学・椙山女学園大学・名古屋芸術大学・名古屋造形大学・京都女子大学・大阪産業大学・広島工業大学・宇都宮大学・京都橘大学・福山大学・広島国際大学・日本文理大学・金城学院大学・東北生活文化大学・福井工業大学・成安造形大学

短期大学：桐生大学短期大学部・女子美術大学短期大学部

専門学校：環境造形学園 ICS カレッジオブアーツ・中央工学校・穴吹デザイン専門学校

高等学校：東京都立工芸高等学校

□CAD部会

部会長 川島平七郎（元東横学園短期大学）

今回はありません

□東日本大震災課題検討部会

部会長 齋藤 修（横浜市立横浜総合高校）

今回はありません

■ H25年度 理事会議事録

総務委員長 上野義雪／白石光昭（千葉工業大学）

＜記録＞松崎（千葉工業大学）

日 時：平成25年6月22日（土）11：00～12：20

会 場：千葉工業大学

出席者：

＜理事＞ 直井、加藤、西出、上野、片山、川島、河村、北浦、栗山、小宮、白石（光）、鈴木（敏）、高橋（鷹）、建部、日原、平田、棒田、松本（直）、松本（吉）

＜評議員＞小原（誠）、河田、島崎、高橋（正）、早野、横山

配布資料：

- 1）平成24年度第2回理事会議事録
- 2）平成25年度日本インテリア学会総会資料
- 3）支部報告・部会報告・委員会報告（参考資料）
- 4）入退会者名簿（2012年10月29日～2013年6月22日）
- 5）名誉会員の推挙
- 6）論文報告集募集規定・論文報告集執筆要領
- 7）「（仮称）大会発表賞」の創設について
- 8）[特別テーマ研究グループ等への研究助成] 事業中間報告
- 9）第25回大会（京都）のご案内
- 10）シンポジウム「いすとインテリア」資料

議 事：

1. 開会宣言（白石）
2. 会長挨拶（直井英雄会長）
3. 定足数の確認（白石）

理事会は出席者19名、委任状4通で合計23（定足数14）、評議員会出席者25名、委任状14通の合計39（定足数31）であり、理事会・評議員会の成立に必要な定足数を満たしていることが確認された。

4. 前回議事録の確認（議事進行：直井会長）
5. 第1号議案：平成24年度 事業報告および決算報告（案）の件
 - ・上野総務委員長より、平成24年度の事業報告および決算報告（案）の説明があり、佐藤・上野（弘）両監事による監査報告（白石代読）を受け、資料2（P.1）の通り賛成多数で承認した。
6. 第2号議案：平成25年度 事業計画（案）および予算（案）の件
 - ・上野総務委員長より、平成25年度の事業計画（案）および予算（案）の説明があった。

- ・会員減少による会費収入の減少が予想されることから、事務局経費を5％、その他の予算は8％を基本とし、昨年度より減額しているとの説明があった。
- ・平成25年度の事業計画（案）および予算（案）について、資料2（P.2）の通り賛成多数で承認した。

7. 平成25年度役員（案）および組織（案）の報告

- ・上野総務委員長より、資料2（P.3）に基づいて、平成25年度役員および組織の報告があった。
- ・顧問に就任した島崎信氏より挨拶があった。
- ・湯本理事の勤務先変更により、九州支部長が空席となっているため、後任を検討する旨、報告があった。
- ・組織表内で、時限付きの特別部会として3部会が記載された旨、説明があった。

8. その他

- ・入退会者について（上野）

前回理事会以降（2012年10月29日～2013年6月22日）における会員の入退会は、資料4の通り入会者13名、退会者4名で異議なく承認された。

- ・名誉会員の推挙について（上野）

資料5の通り、島崎、小松、岡島、小原（誠）、木村（敬称略）、以上5名について、名誉会員として今年度大会にて表彰することが承認された。

- ・論文報告集の規定について（松本）

松本（直）論文審査委員長から資料6の通り、募集規定および執筆要領の改正について提案があった。変更の趣旨は、電子化による作業の効率化である。合わせて第1著者での投稿は2編まで、カラーページ費用の別途徴収などを加筆した。応募期限については、大学院での論文審査時期を考慮して10月31日までとし、今年度は周知が行き届かないことも予想されるため、11月末まで受領の延長や、電子化に合わせた文言の調整は、松本（直）委員長に一任することで承認された。

- ・学会図書コーナーの設置について（上野）

小原二郎名誉会長から、会員の死蔵図書を株式会社岡村製作所「オカムラいすの博物館」の一部に設置してはどうかとの提案があり、関西での事例や陸前高田への寄贈など、前例を参考にして具体的に方法を検討することとなった。

- ・「大会発表賞（仮称）」創設について（西出）

西出副会長から資料7の通り、大会時の口頭発表、パネル発表について、若手会員への奨励を目的とした表彰制度の提案があった。

- ・準会員の単独発表のみを対象としてはどうか、準会員に卒業後、正会員になってもらうように、などの意見があった。
- ・西出副会長を中心に詳細を詰めて、今年度の大会から実施する。

・部会長の交代について（上野）

東日本大震災課題検討部会の部会長が山田理事から齊藤修議員（横浜市立横浜総合高校）に交代した。

・その他、支部および部会の連絡事項については、時間の都合により、懇親会にて報告をお願いした。

・「インテリア百科事典」の出版について（上野）

丸善株式会社から学会宛に、「インテリア百科事典」出版への協力依頼があり、会長を中心として多くの会員から協力を得て進めていく旨、報告があった。

・全国工業高校インテリア科教育大会開催について（上野）

8月1日に千葉市で開催される全国工業高校インテリア科教育大会主催者から、学会会長宛の出席依頼があった。学会と工業高校インテリア科の連携強化の必要性もあり、会長が出席し挨拶する。

・総務委員の補充について（上野）

学会事務局のホームページ運営のため、棒田理事を総務委員会のホームページ担当として委嘱する旨、報告があった。

・研究助成事業中間報告について（川島）

川島理事から資料8の通り、研究助成事業の中間報告について説明があった。6件の申請があり、今後、部会活動費予算の40万円について配分案を検討する。

・島崎顧問からの提言（上野）

島崎顧問からの提言により、学会の活性化を目的とした、若手会員による学会検討会を立ち上げることが報告された。まずは、鈴木（敏）理事（工学院大学）、白石（光）理事（千葉工大）に協力を得て進める。

■事務局より

事務局長 上野義雪（千葉工業大学）

6月22日に事務局のある千葉工業大学において、今年度の総会が開催され、無事終了しました。今後は、総会で承認されました年次計画に沿い、まずは会員の皆様に会費の請求等を行っていく予定です。大変恐縮ですが、予定された日時までにお振込みください。各種お問い合わせ等の場合、できるだけメール（jimukyoku@jasis-interior.jp）をお願いいたします。また、日本インテリア学会ホームページを運営し始めて、約3か月経過しますが、こちらにも情報を随時掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

■討論：本会論文報告集 論文査読への疑問

湯本長伯（日本大学）

1. はじめに

本稿は、ジャーナルの役割の一つである論文投稿への討論について記すものである。キッカケは、私の研究グループが平成24年度の本学会論文集に5篇投稿したところ、2篇は結果的に通過したものの3篇は落とされたという事実に対して、大きな疑問を抱いたことである。個別の論文については、翌年度の論文集に討論を投稿する予定であるが、それ以前にその投稿論文への扱いに疑問があつて、感覚的な表現をすれば「門前払い」といった印象を受けたこと、また同時にこれは「論文数の調整」ではないか？という疑念を持ったので、これを契機に論文委員会に対してこれらの疑念を質し、以降に疑問の無い論文査読、および、学会としての社会的責任のより良い発揮を期待するからある。なお言うまでもなく、最も近い存在である建築学会において、こうした問題は様々に議論され、また種々の問題も起きた歴史から、

1) 論文査読に関する基準の明確化

個々別々の問題について全て基準化することは無理だが、どう捉えどう考えて査読すべきか、あるいは査読とはそもそもどういう役割を持つか、等々の明確化。

2) 論文査読委員の氏名公開

現実的には、公開されている委員だけが査読に当たる訳ではないが、出来るだけ覆盖面で査読をしないことで、一方的であつたり感情的であつたりするような査読を回避することも、目的の一つである。

3) 査読意見書き方に関するガイドラインの設定

かつては日本建築学会の論文査読意見にも、「そもそも論文の域に達していない」とか、「論文の問題設定自体が間違っている」といった、謂わば全否定に近いような、論文執筆者が応えようのない査読意見も散見された。本来の査読意見は、どこをどうすれば論文執筆意図に沿って、分かり易く且つ明解な記述になるか、あるいはエビデンスとして何が不足しているのか、「誰が何時読んでも論文の意味するところが理解でき、他の研究や考察の一つの根拠となり得る」ものになっていないのか、等々、明解且つ具体的に指摘するものでなければならない。そうした査読意見が返って来てしまった場合には、論文委員会の機能として、それに対して待ったを掛けるべきである。

そうした機能の今後の充実も含めて、現状への質問と、もし不足があれば今後への対策を教えて戴きたいと思うものである。

2. 論文委員会・論文査読への疑問

今回の投稿に際して先ず持った疑問は、以下の通りである。

- 1) 1年に1回しか発行されない論文集であるが、1投稿者当たりの掲載論文数制限はあるのか？またそれは公開され、周知されているか？

3. 論文審査基準は公開されているか？

本学会の運営には長く関わって来た筆者であるが、その点は余り議論も無く、とにかく「論文集を出すことを優先する」という共通理解があったように感じている。しかしながら、日本建築学会の例を出すまでもなく、これは必要なものである。内規等も含め、現状について伺いたい。

4. 論文査読委員は公開されているか？

投稿される論文内容によって、広く会員全体を対象にしないと、なかなか適した査読者を選択することは難しい、ということは当然としつつも、その公開は大切である。また同じような理由で、インテリア学会会員外から査読委員を委嘱する場合にも、それなりのreasonとaccountabilityが必要であろう。また各論文毎に誰が査読者であったかを公開することには別の問題があるが、全体としてどういうメンバーが査読をしているのかを明らかにすることは即時実行可能なことであろう。現状と今後について伺いたい。

■連載『インテリアの行方』

「インテリアリフォームの現状」

西田恭子（三井のリフォーム住生活研究所）

■リフォームの現状…

リフォームの世界は今だかつてない大きなうねりの中にいます。

一つに、昨年3月、国土交通省住宅局から「中古住宅・リフォームトータルプラン」が発表されたことがあります。2020年までに中古住宅の流通とリフォーム市場の倍増に向け、新築中心の住宅市場からリフォームにより住宅性能を高め、中古住宅流通により循環利用されるストック型の住宅市場に転換することを目的にしたものです。リフォームといっても二つあり、住み続け型のリフォームとして、今暮らしている方のライフスタイルの変更に合わせてのリフォームと、売買をされるときに住み替え型のリフォームがあります。この住み替え型リフォームが今後動きを広げていくことでしょう。

また、国会では耐震改修促進法の改正が通過しました。この中で、不特定多数が使う大規模な建築物は、耐震診断の義務化が図られており補助制度を用いながら、耐震改修促進に向け動き出しています。

一方、ライフスタイルやライフサイクルの中で暮らしを見据えるリフォームも浸透してきました。都心暮らしへのこだわりや、自然素材、SOHO、ワンルーム化など自分流を極めたいという思い。そしてセカンドハウスの取得や戸建からマンション移住、親との近居・隣居などと、住み替え需要が増えているためと思われます。そこで建築の基本性能から追うだけではなく、リフォーム計画を考える際にはインテリアも含めた総合的な住空間をイメージしてデザイン&プランニングを行なうことはとても大切なことになっています。

■インテリアリフォームに求められるスキル

当社でもリフォームの設計者は、インテリア業界から転職してリフォームへとか、建設会社あるいは設計事務所リフォームへと、さまざまな仕事歴を持っています。どの分野から来たとしても建築士の資格を求められます。デザインが求められる時代でありながら、リフォーム工事は施工面での専門要素が多く、デザインとプランニングが良くても、それを実現する施工力がなくては思い描いた住まいは完成せず、ハードなリフォームならではの難しさを知識として知り、経験として積み重ねていく必要があります。それでも住宅リフォームで忘れてはいけないのは、既存建物との折り合いを付けつつ将来に向かった生活デザインを作り上げているということです。

インテリアはカラーや素材、ディテールの組み合わせで多彩に変化します。リフォームのように設計上制約の多い空間づくりの中では大きな役割をはたします。住まいの全体計画から小さな模様替えまでのインテリアコーディネートまで手腕が問われる分野です。

■ライフステージの中でのリフォーム計画

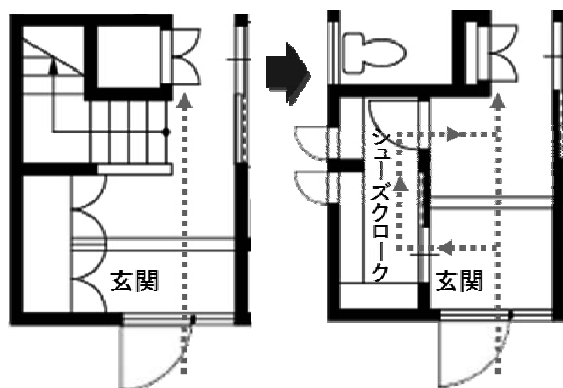
従来はリフォームでは新築には及ばないというのがリフォームのイメージだったのですが、今やリフォームだからこそ新築を超えることができるのではとの考えも進められています。断熱・通風・採光などの基本性能を補助金利用しながらスマートハウス化するのはもちろんですが、ライフステージに合わせたデザインがリフォームでは可能だと考えられるからです。

年代によって違うリフォームポイント。

30代の子育てファミリーの玄関

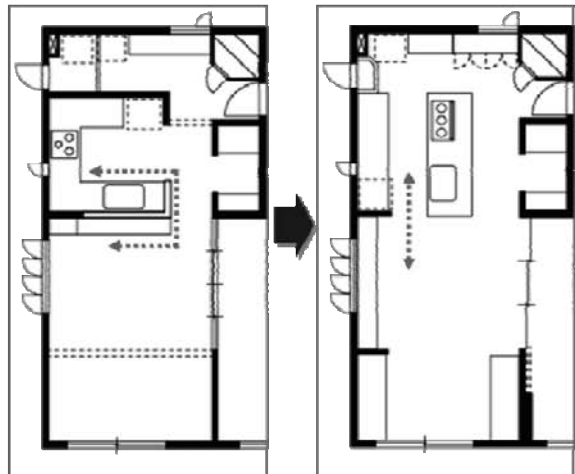
家の顔である玄関が、子育て世代の30代ファミリーの家では、いつも子供の靴で散乱していることが多いもの

です。この世代こそシューズクロークを設置し、動線的にも玄関からシューズクロークそして廊下にあがるという、玄関たたきには一足も靴が残らない工夫も有効です。



40代ファミリー アイランドキッチン

子育てが一段落し、本格的に働く妻も増えてくると対面式キッチンが本当にいいのか？という疑問がわいてきます。独立型キッチンからの解放として支持されてきた対面式も、決してスムーズな動線とはいえません。配膳代わりの食卓テーブルと一列にセットしたアイランド型が注目されています。



50代から終の住まいへの希望

子供も独立して夫婦の自立と共生を模索する中で寝室を分ける、あるいはそれぞれの書斎を確保する希望も出てきます。また最後の夢の実現としてゆったりとした窓のある浴室など。年代によって変わる家への希望を新築時の最大公約数的プランから、自分ならではのプランに変化させていくことも、リフォームの魅力でしょう。

窓のある広い浴室に



既存建物の現況把握からはじまり、変更の可能性をきちんと提供する。自分流の住まいを一般的にではなく正面から見据える住まいづくりはリフォームインテリアと共にあるといえるでしょう。

政策課題としても住宅ストックをメンテナンスし、いいものを長く使うということが大きな動きである中で、リフォームの世界も大きく動き始めています。

■もう一度 インテリアの行方

湯本長伯（日本大学）

平田編集長の指示で、久しぶりにこのコラムを書かせて戴きます。前回は「インテリア学会の行方」と題して書かせて戴いたが、実は学会ばかりでなくインテリア産業も、資格職能団体も学校も、「インテリア」と付くものは相変わらずというか、いや一時期よりも更に心配になって来ていて、その底の浅さに呆然としているところです。このコラムは本来、インテリア分野への前向きな提案や所見をご披露戴くものでしたが、そう悠長なことも行っていられないので、緊急提言とまでは行かないとしても、インテリア分野への幾つかの提案をさせて戴こうと思います。

冒頭インデックスさせて戴ければ、以下の3点

- 1) インテリア業界への疑問
- 2) インテリア分野での資格職能の確立に向けて
- 3) インテリアにおける地域格差への問題意識

一応は章を分けて、書かせて戴きます。

【インテリア業界への疑問】

先ずは業界ですが、「景気が良いときは良いが、悪くなると最初に悪くなる」、「産業とは言えないほどの底の浅さ」などと言われて久しいのに、一向に改善される兆しはありません。また業界の定義も難しく、先ずはインテリア産業というものが存在するのか？その実態は何なのか？ナントも言えないというのが正直なところでしょう。

インテリア産業＝インテリアの環境を提供する産業集積、と言いたいのですが、そうはなっていません。椅子・テーブル・ベッド等の家具、照明、カーテン・ブラインド等のウィンドウ・トリートメント、またエキップメントとしてもエアコン・暖房器具、水廻り・トイレ廻り、等々、多くは製品別の製造業で締められていて、総合的なインテリア環境を提供する企業は、特に全国レベルで言えば、かなり限られています。地方には、そうしたエレメントを一堂に集めて提供している「〇〇インテリア」といった企業はありますが、あくまで小売業であって産業集積とまでは言えません。こういう環境では、ユーザーは個別のショールームを回って色々と品定めをすることになり、その手間も大変なものです。何故、インテリア産業＝インテリアの環境を提供する産業集積、にはならない、あるいは、ならなかったのでしょうか？そのおかしさ、不合理さは誰が考えても分かることで、結局は一点買いの積み重ねとなれば、トータルなインテリア環境を目指すことから、どんどん遠ざかるような気がします。

近年、某リク〇〇という企業グループが出現し、この問題点に対して企業側から改善を図ろうとする試みだと思っ大いに応援したい気持ちでしたが、残念ながら特に地方では未だ慣れないという人も多く、現時点で決めつけることは出来ませんし、そうする積りもありませんが、折角の試みが必ずしも上手く行っている訳でもないようです。なぜ部品でありエレメントなのだろうという疑問は、この何10年か解決されないままです。

それからインテリア産業協会という団体もありますが、このインテリア業界は基本的に組織率が低いことで知られているようです。特に地方では、例えば家具業界は一匹狼の集まりだとか、そもそも一匹狼の会というのは自己矛盾だとか、何だか良く分からないのではありませんが、どうも余り仲は良くないらしいとか、業界あげて何かを推進しているなどの動きを感じることは極めて少ないと言えます。そして個別の業界を集積しているはずの全インテリア企業の協会・団体は、もっと組織率が低いように感じられ、一本にまとまった意思を持ち何かに向けて一致して行動する、等々の動きはこれもほとんど感じられることがありません。しかしユーザーは個々のエレメントが欲しいのではなく、総合的で快適なインテ

リアの環境が欲しいのではないかとそれにこの業界は応えているのだろうか？というのが率直な疑問であり、しかも私にとっては40年くらい続いている疑問なのです。インテリア環境の捉え方、その提供の仕方、そのための企業・産業の在り方を考え直さないと、我が国のインテリア環境は少しも良くなれないと思いますし、一方でインテリアの企業・産業も、「底が浅い」と言われるままでは、「ビジネス的にも余り上手く行かない」ままを続けることにはならないのでしょうか？

インテリア空間＝生活空間であり、基本的なその生活の質を守るためには必須の産業・企業であると思われる会社が、社会から必要なものと認識されることは金輪際ないのではないのでしょうか？個人のタレントが変えられることは、ほんの僅かです。日本のインテリア文化と環境を変えるべき企業・産業の在り方、デザインを再考すべき時ではないのでしょうか？経済産業省でも何省でも良いのですが、そうした審議会をスタートして、真剣に産学官で議論してみたいと思うのですが、皆さんは如何お思いでしょうか？

【インテリア分野での資格職能確立に向けて】

この学会には、例えばインテリアコーディネーター(IC)やインテリアプランナー(IP)の資格試験に関わった経験をお持ちの方も多いと思います。実はこれだけでなく、MRMマンションリフォームマネージャーとか、KSキッチンスペシャリストとか、日本の成長期に無茶苦茶な勢いで沢山の資格を創り、いまでも困っているという実態があります。その中でも栄枯盛衰があり、例えばIPは、既に受験者が1,000人の大台を割る傾向にあることが知られています。KS然りMRM然り、実はインテリアに関する資格は比較的著名なコーディネーターだけではなく、私も良く知らないインテリア〇〇士とか、あるいは東京商工会議所から始まった福祉住環境コーディネーターというのも、レッキとしたインテリア関連の資格だとすれば、実は大変な数があるって正直訳が分からないと言えます。これから縮退する日本社会の中で、こんなに資格があつて、しかも違いも良く分からないという現状は、本当に大丈夫なのだろうか？という最初の心配・不安に戻らざるを得ないのです。

次にこの問題への一つの投げかけとして、JIC日本インテリアコーディネーター協会協議会の活動を採り上げます。私は20数年間インテリアコーディネーター試験の作問委員をやっており、この資格の行く末(行方?)を大いに気にしていました。そんな中で福岡IC協会の会長就任を懇願?されたことがきっかけで、試験に合格して資格を得た人たちの状況を具に知ることになりました。正直これを語り出すと3時間くらい掛かりそうなので止めますが、この会報を読んでおられる方の中にも、

その酷い実態をご存知の方は多いと思われます。勿論この資格だけでなく、IPにしてもMRMにしてもKSにしても、「名称独占」ではあるが「業務独占」では有り得ず、つまり「資格を取っても、そのままでは何の役にも立たない」、「資格があるからという理由では何も出来ない」という実態があります。「純粋に勉強の成果を見る一つの目標である」という意見もありますが、実際にはそれは隠しているとも言える実態です。皆さん資格を取ってから、「え〜！」と言うことになるのです。とは言え、法律に根拠した「医師」「法律家」「建築士」以外は、民間の団体が任意に施行している資格であって行政は一切関知しないという建前なので、受けるのも勝手、役に立つか立たないかを判断するのも勝手、自己責任ということになります。折角に夢を持ち一生懸命勉強して資格を取った人には、残念な結果となることが多いのです。これは社会的な不合理でありある種の矛盾であり、そして不正義とも言えます。これは何とかしないとイケませんし、誰にも頼れないとすれば、インテリアコーディネーターの資格者自身が、何とかして行くしかないのが現実なのです。

こうした実態を踏まえて、数年前になります九州プロパーの各県協会が大同団結し、先ずは現実の問題点を語り合い様々なレベルの交流を重ねることで、少しでも解決策を議論し実行に繋げて行くことを始めました。これがKICK九州インテリアコーディネーター協会協議会です。これはすぐ大きな成果を揚げました。交流から始まって、沢山の事項で連携協力が実現し、詳細をくどくど述べはしませんが、少なくとも皆が元気になる状況を創り出しました。この九州IC協会協議会が中心になって造った全国組織が、JIC日本インテリアコーディネーター協会協議会です。目的というより動機は、九州で上手く行った各地域協会の連携協力を全国に広げようというもので、昨年11月には一般社団法人化も行い体制は整いました。全国組織が出来たからといって、直ぐにICの組織率が上がる訳でもないでしょうし日暮れて道は遠いのですが、「資格者が自ら道を切り開く活動」自体は大変大切なものです。インテリア界挙げて、大事にすべきです。

しかしそれと同時に、昨日までの私自身も含めた試験事業実施側や、どんどん資格ばかり造って天下り先を増やした行政も、これからの縮退社会の状況を考えれば、いま反省と共に何か手を打つべき時と言えましょう。私自身、造ることに加担したのはもう取り返せませんが、今これはしょうがないと言うのではなく、少しでも何とか出来るようにすることが、謂わば良心の証かとも思うのです。それに加えて先述のように、インテリア関係の資格は山ほどあるのです。この混沌と混乱をそのままにして、ICだけで頑張っても、きつとうまくは行かない

でしょう。種々のインテリア資格を統合したような、謂わばスーパー・インテリアコーディネーターといった統合資格を目指して、キッチンもマンションリフォームも、テキスタイルもカラーも出来れば照明や室内温熱環境も含んだ、色々なインテリア分野の団体・協会が協力して、これからの日本インテリアを考えるべきではないでしょうか？

かつてIP資格事業が落ち込み始めたとき、守屋先生・小原先生や栗山さんと共に、東京を手始めに全国にIP協会を造って何とかしようとしたことを、様々な感慨と反省を含めて思い出しています。但し、IP協会は出来ても、そしてそれなりに今も元気に活動はしていますが、IP資格事業だけは既に手遅れになってしまったようです。残念です。

いま「インテリア分野での資格職能の確立に向けて」、何か明快な解決策や確かな見通しがある訳ではありません。それでも何とかなくてはという気持ちは、人一倍あります。全国協会という大同団結の場は、次第に出来上がって行くでしょう。そこをプラットフォームに何をして行くか、良い知恵をお持ちの方は是非教えて戴ければと思います。

【インテリアにおける地域格差への問題意識】

私は20世紀末に福岡に異動し、九州芸術工科大学、そして九州大学・芸術科学技術共同研究（産学連携）センターに10数年在職しましたが、それまで生まれてから半世紀ほど過ごした東京とは余りに違う環境に驚きを禁じ得ませんでした。とにかく違う、地方と東京は。それは当たり前のことなのですが、東京に居住していると、それが分かりません。そのことの方に、私は驚きました。1都3県だけでなく東京から1時間台で行ける静岡・群馬・栃木・茨城・福島・山梨・長野・新潟等を含めて東京圏と言え、平成22年時点で（統計局資料）人口は日本の半分、GDPは6割は優に超えている状況でしょう。これを東京一極集中と言いますが、ついでに言えば北海道の4%の面積の札幌には、40%の人口が済んでいます。九州プロパー6県で1,000数百万人のうち、福岡県に既に5百万人超が住み、1,000万人を切る頃には福岡県は軽く6割を超えるでしょう。札幌一極集中、福岡一極集中もまた、深刻なのです。大正9年に5,600万人だった日本の人口が、平成23年は1億2,800万人、但し平成117年には4,600万人になるのだそうで、そこまでは私の寿命から言っても面倒は見切れません。それでも言えるのは、大都市圏とそれ以外では全く違う世界が広がっているということです。

福岡県の北九州市や福岡市は大都市ですが、その直ぐ周辺では未だ戦後間もない昭和の生活も残っています。水洗トイレが当たり前とっていて、汲み取り便

所に驚いた幼稚園児の頃の私ですが、それは60年経った今でも確実に残っているのです。水洗でシャワートイレが当たり前、とは行きません。畳の部屋ばかりで椅子やテーブルが入らない住宅も沢山あります。洋式のインテリアなんて何ですか？という世界もまだまだあるのです。そういうことを受けて考えると、地域の違いをきちんと認識しておくことが、日本全体のインテリア文化をより本質的に捉え、そしてより良いものにして行くことに繋がると思います。東京からだけ見ていると、その当たり前のことが見えなくなります。もっと多様性 diversity と継続性 sustainability の中から、これからの日本のインテリアを考えたい。それは、東京からだけでなく九州からの視点ももつことで、あるいはそれに啓発されて、もっとグローバルでインターナショナルな視座をもつことで、この十数年間に私自身にも見えて来たものです。日本のインテリアの先端も見つめて来ましたが、一方で後端も見なければならぬ、そして多くの知恵を多方面から結集して、皆で知恵を絞ることが必要です。

地方では「インテリア」の学校が、どんどん減っています。数少ない工芸高校はともかく、工業高校からインテリア科は駆逐されつつあります。秋田で長い間の実績を持ち、評価されて高校から短期大学になり、期待されて大学になろうとした学校が田中文化科学大臣に待ったを掛けられたのは、まだ記憶に新しいことです。社会的にほとんど理解されてなく、その価値も評価されていないことを、如実に現していると思います。先に挙げたJICは、IC協会の集合体であるだけでなく、インテリアに関する様々な団体・協会を受け入れるプラットフォームとして機能する定款になっています。そういう考え方を強要する積りはありませんが、今こそ「インテリア」界の大道団結が必要と考えています。「日本のインテリア」

は特殊です。その成り立ちを歴史的に捉え直すことも、大切でしょう。これは「インテリアに関する連続研究会」等で、九州に行く前に考え始めました。いま九州から帰って来て、インテリアの尻尾もきちんと考えて、首尾一貫したインテリアの体系を確立せねばなりません。それは最早この学会のカバーする範囲では無理なので、もっと実務者や若い人も含めた幅広いウイングで考えて行こうと、私自身は歩き始めたところです。この学会では「インテリア大系」の出版は社会的認知を得られませんでした。それを一緒に考えて下さる若い人を同時に育てる基盤形成によって、それは何時か出来ることだと思います。

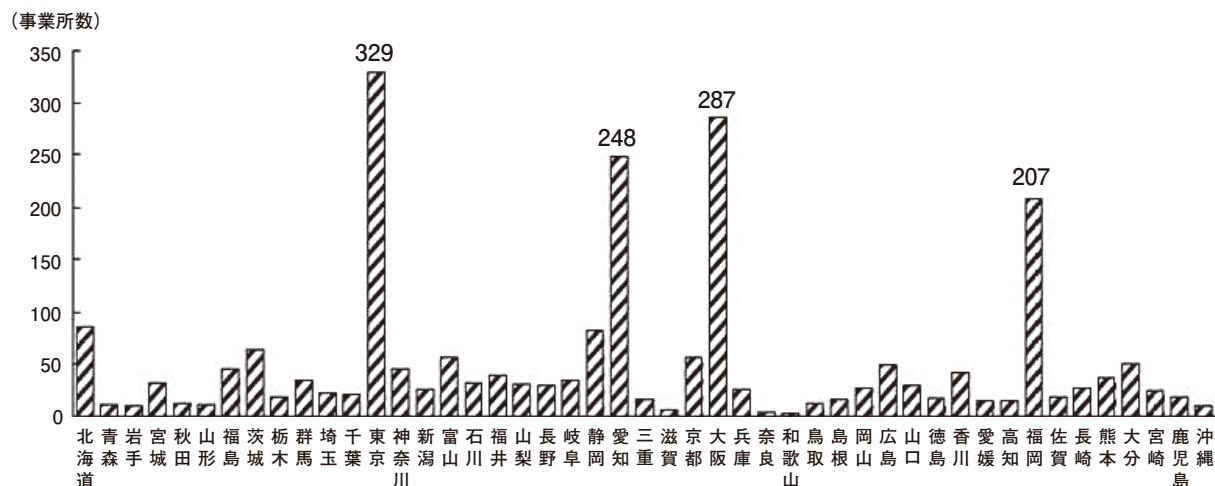
このことに、どうタイトルをつけたら良いのでしょうか？欧州とは異なる日本社会の中で、広義のデザインの役割をどう位置づけたら良いのでしょうか？そんなことを一緒に考えるシンポジウムを、今年度から始めました。もう一度、都市も建築もインテリアも、またそれに関わる様々なモノも、それから地域社会の種々の仕組みやルール、そして行事や祭事やその他イベントも含め、これからどうデザインし決めて行くのか、実は多くの宿題があると思います。これは私にとっての宿題ではありますが、また同時に皆さんにとっても宿題なのではないかと思うのです。もし気にして戴けたなら、こうしたことを考える「有楽町研究会」に、参加戴けたら有難いと存じます。誰にとっても、余り残り時間はないのではないかという焦りもあり、強力な援軍を戴ければ嬉しいのです。最後は取り留めもない話になってしまいましたが、一緒に考えて戴ければ幸いです。

JICのURL

<http://jic2013.blog.fc2.com/>

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JIChomeP/>

デザイン企業の分布



4大都市以外でのデザイン企業の少なさ

■ 編集後記

平田圭子（広島工業大学）

今回は総会後の会報です。総会と理事会の議事録が掲載されていますので、ご確認ください。

総会終了後に、シンポジウム「いすとインテリア」（講師：島崎信 氏、織田憲嗣 氏）が開催されました。その楽しかった時間を、織田憲嗣氏に会報の上で再現して頂きました。また、西田恭子氏に“インテリアの行方”の「インテリアリフォームの現状」にて、現場での具体的な例示を挙げて説得力のあるリフォームの現状を伝えていただいています。お忙しい中、両者をはじめ、各委員会長、部会長、支部長等、ご執筆ありがとうございました。

なお、今年度から日本インテリア学会顧問に就任されました島崎先生には、次号にて原稿をいただく予定になっていますので楽しみにお待ちください！

湯本長伯（日本大学）

本会報は、総会後大会前号となります。京都での大会が来月となりましたが、大阪神戸とはまた異なる味わい

の大会となるでしょう。楽しみです。

インテリアの行方、本当に気になる行方です。会員の皆様との交響において、もっと議論を深められたらと思う毎日です。色々な試みを含めて、この会報が学会として必要な議論の場となれば、活性化の大きな梃子になるかと思っています。

■日本インテリア学会会報第52号（2013. 9. 23発行）

編集者：平田圭子

発行者：直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会：湯本長伯、片山勢津子、平田圭子
松田奈緒子、若井正一、渡辺秀俊

e-mail：JASISeditor@yahooogroups. jp

■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 上野研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail：jimukyoku@jasis-interior. jp